

前近代における東アジア三国の文化交流と表象

—朝鮮通信使と燕行使を中心に—

Cultural Exchange and Representation of China,
Korea and Japan in the Premodern Age

劉 建輝 編

国際シンポジウム 29

2006

International Research Center
for
Japanese Studies

国際日本文化研究センター

国際シンポジウム 第29集

前近代における東アジア三国の文化交流と表象
—朝鮮通信使と燕行使を中心に—

Cultural Exchange and Representation of China, Korea and
Japan in the Premodern Age

非売品

発行日 2011年3月31日
編集 劉建輝
発行 国際日本文化研究センター
京都市西京区御陵大枝山町3-2
〒610-1192 電話 075-335-2222
印刷 株式会社 図書印刷同朋舎
京都市下京区中堂寺鍵田町2
〒600-8805 電話(075)361-9121

©国際日本文化研究センター

— 目 次 —

前近代に於ける東アジア三国の文化交流と表象 —朝鮮通信使と燕行使を中心に— 崔博光	1
가사를 통해 본 중국과 일본 —〈무자서행록〉과 〈일동장유가〉를 중심으로 허남춘	37
東アジアの思想史の流れ——心学の視点から 吉田公平	59
近世初期医事文化と庶民文学との接点をめぐって 花田富二夫	61
朝鮮絵画の流れ —通信使画員の場合— 吉田宏志	63
信を通ずる関係の発明 —「通信」断章— 濱田陽	67
초월(超越)과 응시(凝視) 비잔틴·러시아 이콘(聖像)과 동아시아 산수화(山水畫)의 상호비교 李德炯	81
朝鮮通信使による日本語韻文史料 —発句、和歌などの短冊色紙をめぐって— 管宗次	103
山水と風景のあいだ —韓国開港開化期の見聞録における間文化的自己表象— 黃鎬德	109

朝鮮通信使の文化交流の受け手 —知識人と民衆	
仲尾宏	139
《热河日记》中反映的清代民族政策	
廉松心	141
跨文化交流与文化误读 —以 17-18 世纪中韩文人的交流为中心	
牛林杰・李学堂	149
天理大学附属天理図書館所蔵『東槎録』について —金仁謙『日東壯遊歌』との関連から—	
長森美信	163
三部の燕行録から見た朝鮮文人の中国観	
韓梅	177
幕末の対欧米外交を準備した朝鮮通信使 —各国外交官による江戸行の問題を中心に	
佐野真由子	191
文人たちの宴「以德醉人、勝於以酒」 ——1763～4（宝暦 13～明和元）年の通信使行——	
高橋博巳	211
筆談としての学問論、詩論 ——1748年の朝鮮通信使来訪——	
徳盛誠	223
俗文藝と通信使	
杉下元明	239
青莊館李徳懋文学における思想的基盤と公安派詩論の受容様相研究	
金昞國	247

明 王世貞の文学思想と虞裳李彦瑱の漢詩 李春姬	269
国書伝命礼にみる朝鮮通信使の服飾と徳川将軍家の服飾 鄭銀志	285
洪大容の科学知識と社会思想 川原秀城	309
アストロラーブの東伝と朝鮮の簡平渾蓋日晷 18世紀朝鮮における西学受容の一つの成果とその限界 安大玉	327
日曜日の世紀としての十八世紀 平川祐弘	339
編集後記	349
プログラム	351
執筆者一覧	355

前近代に於ける東アジア三国の文化交流と表象 —朝鮮通信使と燕行使を中心に—

崔 博光

1. 序
2. 文明・貿易の道
一漢陽から北京、江戸へ
3. 異文化の受容と朝鮮の朱子学
 - 1) 小中華思想と夷狄の国
 - 2) 朝鮮の朱子学と仮名草子
4. 文化の発信者と転信者としての使節
 - 1) 朝鮮の文人と古義堂
 - 2) 北学派文士と清朝考証学
5. 平和と文明圏の形成
 - 1) 東医宝鑑と実証漢方医学
 - 2) 西学の受容と生活化
6. 結

1. 序

近世に於ける朝鮮、徳川幕府、清の東北アジア三国は一つの儒教文明圏を形成していた。それには様々なことが想定されるが、長く持続された平和と文化交流がその要因の一つとして挙げられる。鎖国体制下に於いて東北アジアの地域内の唯一の開かれた通路口は朝鮮に始まる。朝鮮は地政学的特性上「事大交隣」政策を取っており、清には燕行使を、徳川幕府には通信使をそれぞれ派遣した。この使節団が鎖国下に於いて東北アジア三国を連結する橋梁的役割は勿論、文明圏を形成する牽引車的、立役者的役割をしたということはすでに周知のことである。

朝鮮は清に総673回の燕行使を、徳川幕府には12回の通信使を派遣した。本稿では朝鮮から派遣した燕行使と通信使が文化の発信者と転信者としての役割と活動を考察し、現代的意味を探るものである。

又、これを通して文明圏内の政治、経済、文化、文明という巨視的視野と、一方漢詩文、文学、学術、思想、韓方医術、西洋学術の受容という具体的な面などの実相を実証的かつ具体的に考察し、近代的意味として知の蓄積、さらに東北アジア文明圏形成の断面を糾明するものとする。

2. 文明・貿易の道—漢陽から北京、江戸へ

朝鮮は建国以来、事大交隣政策を標榜し、その後朝鮮朝後期にもこの政策を継続維持した。「燕行使」とは清に派遣した使節のことである。前朝の明に対しては朝天使と称し、清にしてはそれとは別に燕行使と呼んだ。これとは別に、日本に派遣する使節は通信使という称号を使用した。「通信」とは「信を通わす」という意味で、隣国の間に誠信をもって往来するという意味である。

燕行使はその任務に従って正朝使、冬至使、聖節使、千秋使等の定期の派遣があり、その外にも謝恩使等各種の慶弔事に不定期的に派遣する場合もあった。朝鮮が清朝へ最初に使節を派遣した1637年から最後の1876年まで約240余年にわたって総673回の「燕行使」を派遣した(『同文彙考』)。反面に清が派遣した勅使は165回である。両国が相互派遣した回数を合わせると838回で1年に3、5回程度の往来であることになる。

一方、朝鮮が徳川幕府に通信使を派遣したのは第1次である1607年から最後の派遣となる1811年まで延べ12回である。それに対し、徳川幕府が朝鮮に派遣した修聘参判使(通信使 清來差使)は約50回で、彼らは幕府の外国の窓口である対馬藩の案内で釜山の東萊府と修聘に関する任務を遂行して、帰国することになる。

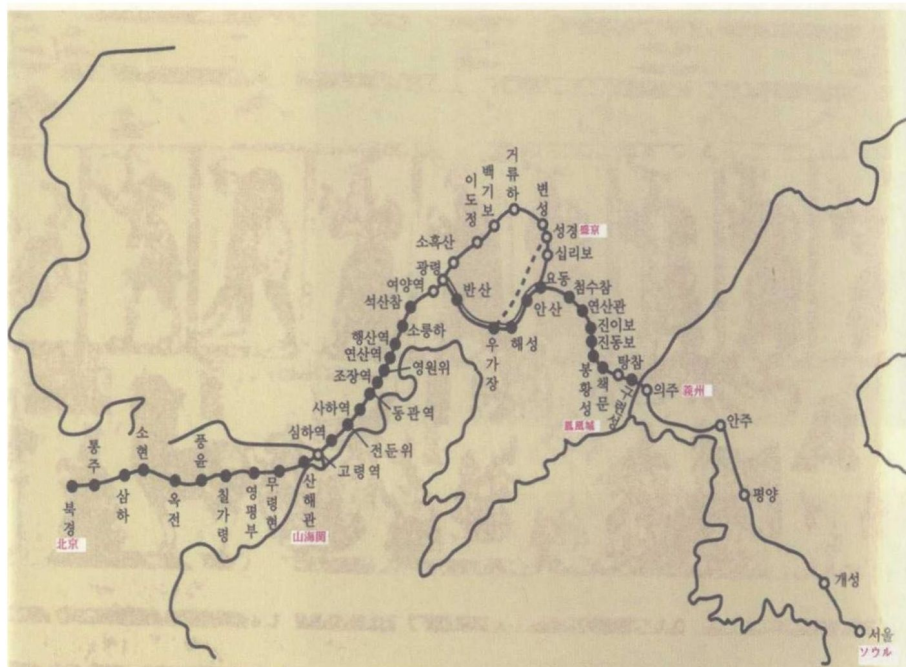
燕行使の構成人員は馬夫まで含めて大概250名ほどである。通信使の場合は500余名であり、この人員中船員が100余名になる。燕行使の往復に所要する期間は派遣の時期により少し違うが、大概4、5ヶ月程度の期間が所要される。清の勅使一行は50余名であり、滞留期間を包めて往返に所要される期間は短いほうである。通信使の場合は海の道であるため気象条件により日程は違うが、大概 7、8ヶ月ほど所要される。燕行使は路程の時期により、所要期日が若干違う。別表の路程図から見るように義州から盛京までが540里、盛京から北京までが1,509里大概2,000余里である。この全路程の主要地点、殊に柵門、北京、盛京、中後所(東関駅近所)等の地で貿易が行われる。

朝鮮通信使一覧表

年 代			正使	副使	從事官	製造官	書 記	訳 官	写字官
西暦	朝 鮮 日 本	干支							
1607	宣祖40 慶長12	丁未	呂祐吉 (順溪)	廉遜 (七松)	丁好寛 (一翠)	学官 楊万世		金孝齊・朴大根 韓徳男	書寫員 卞鉄寿
1617	光海19 元和3	丁巳	呉允謙 (敬澤)	朴椿 (雲溪)	李景履 (石門)			朴大根・崔義古 康通聖・鄭純邦 韓徳男	宋孝男 嚴大仁
1624	仁祖2 寛永元	甲子	鄭玄	姜弘承 (道村)	辛啓榮 (仙石)			朴大根・李彦瑞 洪喜男・康通聖	李誠国 (梅庭) 金信男
1636	仁祖14 寛永13	丙子	任統 (白麓)	金世謙 (東溪)	黄景 (漫浪)	吏文学官 權試(菊軒)	文弘績 文郁	洪喜男 姜潤賓 康通聖 李長生	朴之英 能書官 全家 (梅庭) 趙廷扶
1643	仁祖21 寛永20	癸未	尹順之 (津溪)	趙綱 (龍洲)	申瀛 (竹堂)	談祝官 朴安期(螺山)		洪喜男 李長生	金義信 (雪峯)
1655	孝宗6 明暦元	乙未	趙所 (翠屏)	俞錫 (秋潭)	南龍興 (松谷)	談祝官 李明修(石湖)	裴純 金自卿 朴文源	洪喜男 金謙行 洪汝南	金義信 韓応登 郭琛 尹徳容
1682	肅宗8 天和2	壬戌	尹顯完 (東山)	李彦綱 (鷺洲)	朴慶俊 (竹庵)	成璣(翠墟)	林椿 李聯齡(鶴溪)	朴再興 卞承業 洪禹載	李三錫 (雪月堂) 李華立
1711	肅宗37 正徳元	辛卯	趙泰徳 (平泉)	任守幹 (靖庵)	李邦彦 (南園)	李潜(東郭)	洪舜衍(鏡湖) 嚴漢重(龍淵) 南聖重(泛叟)	崔尚維・李碩麟 李松年・金始南	李寿長 李爾方 (華庵)
1719	肅宗45 享保4	己亥	洪致中 (北谷)	黃潜 (鷺汀)	李明彦 (雲山)	申維翰(青泉)	張応斗(菊溪) 成夢良(長嘯軒) 姜栢(歸教子)	朴再昌 韓後璣 金國南	金景錫 鄭供榮
1748	英祖24 延享5 (寛延元)	戊辰	洪啓禧 (瀟瀟)	南泰善 (竹裏)	曹命采 (蘭谷)	朴敬行(矩軒)	李鳳璣(清庵) 韓近(醉雪) 李命啓(海阜)	朴尚淳 玄徳淵(疏斎) 洪聖龜	金天秀 玄文龜
1764	英祖40 宝暦14 (明和元)	甲申	趙暉 (清谷)	李仁培 (吉庵)	金相端 (弦庵)	南玉(秋月)	成大中(龍淵) 元承孚(玄川) 金仁謙(退石)	崔鶴齡(居今介) 李命尹(華庵) 玄泰賢(長洲)	洪聖源 (景雲) 李彦佑 (梅窩)
1811	純祖11 文化8	辛未	金顯喬 (竹里)	金勉求 (南霞)	庵止	李顯相(太華)	金善臣(清山) 李明五(泊翁)	玄義海(加加軒) 玄斌(一蓮) 崔昔(菊倉)	皮宗聯 (東園)

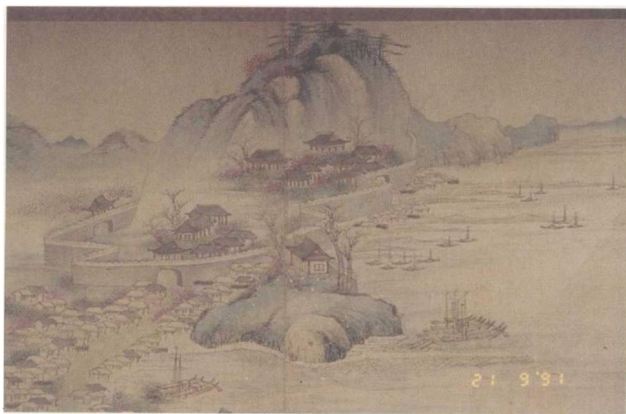
西 日	良 氏	氏 目	接待僧	使 命	総人員 (大坂留) [京都留]	使行録	備 考
李弘胤		朴仁基 辛春男	景徽玄猷	修好・ 回答兼綱還	504 100	海樑録(慶七松)	鎌倉遊覧・駿河湾 遊覧・洛中遊覧
柳成業		鄭宗礼 文賢男		大坂平定・ 回答兼綱還	428 78	東槎上目録(景徽還) 東槎日記(朴修) 扶桑録(李石門)	京都伏見轉札 俘虜人説諭官巡回
李彦弘		鄭崑 黃德業	規伯玄力	家光贊職・ 回答兼綱還	460 114	東槎録(姜弘重)	俘虜人説諭官巡回 烏銃購入
金明因 (差頭) 許翁 尚淳		白士立 韓彦福	王祥玄瑞(東福寺) 玄際玄符(東福寺)	泰平之賀	478 (不明)	丙子日本日記(任統) 海樑録(金東溟) 東槎録(黃漫浪)	日本国大君号制定 日光山遊覧 唐酒聖著 捷解新語 馬上才(好馬津郎)
金明因 (命因) 李起龍 (兄忌)			鈞大永浩(建仁寺) 周南門日(東福寺)	家綱誕生	477 (不明)	東槎録(趙龍洲) 海樑録(申竹堂) 癸未東槎日記	日光山致祭 馬上才(蔡煙御殿)
韓時範 (官簿)		韓字因 崔綱 李經典	茂源紹伯(建仁寺) 九岩中達(建仁寺)	家綱贊職	485 (100)	扶桑日記(趙斯) 扶桑録(南堂谷)	大藏院家綱致祭 馬上才はなし
成錦健 (東槎)	鄭斗俊	李秀壽 周伯	太虛顯雲(相国寺) 南宗相辰(東福寺)	新古贊職	473 (113)	東槎録(金指南) 東槎録(洪禹載)	副使轉將洪禹泰(滄浪) 馬上才(八代洲河岸)
朴東普 (吉仁子)	奇斗文	玄万全 李潤	別宗相緯(相国寺) 雲堅永集(建仁寺)	家宣贊職	500 (129)	東槎録(任守幹) 東槎録(金顯門)	新井白石の改革 馬上才(田安門内) 所司代問壁
成世輝	梅 道	白興鈴 金光潤	月心性漢(天竜寺) 石駕竜昌(東福寺)	古宗贊職	475 (129)	海樑日録(洪北谷) 海樑録(申青泉) 扶桑紀行(鄭后橋) 扶桑録(金濤)	馬上才(田安門内) 弓射芸(上野車坂下) 所司代問壁
李聖麟 (蘇齋) (崔北 (居其命)	趙崇寿	趙德祥 金德壽	家岩承堅(天竜寺) 王顯守瑛(東福寺)	家重贊職	475 (109)	奉使日本時間見録(曹龜谷) 隨使日録(洪景海) 日本日記	馬上才(田安門内) 弓射芸(上野下寺町) 崔大宗朝殺事件 朝鮮人因役金御免越訴 所司代問壁
金有光 (西嶽)	李佐同	南斗星 成源	羅大承贈(相国寺) 杜呂龍芳(東福寺)	家治贊職	477 (110)	海樑日記(趙濟谷) 癸未使行日記(吳大齡) 癸未隨槎録 日本録上目録(成大中) 仙槎漫浪集(成大中) 和同志(元重華) 日東壯遊歌(金退石)	馬上才(田安門内) 弓射芸(上野下寺町) 崔大宗朝殺事件 朝鮮人因役金御免越訴 所司代問壁
李義美 (名園)	朴景郁	金鎮周	月耕玄宣(東福寺) 龍潭周煥(天竜寺)	家弁贊職	328	辛未通信日録(金履齋) 東槎録(柳相衡) 烏遊録(金善臣)	封馬府中轉札 馬上才はなし

[図 1] 通信使一覽表 辛基秀・仲尾宏作成



〔図2〕燕行路程道

燕行使の正官は使行の任務により若干の差異があるが、30名乃至35名で構成される。その他、馬夫奴子が220余名になる。正官の中には正使、副使、書状官の以外に堂上官、上通事、小通事、質問従事官、押物従事官、駕丁押物官、押幣従事官、押米従事官、清学新遞児、偶語別差、別遣御医、写字官、医員、画員、軍官、灣上軍官等で構成され、この中に貿易を管掌する訳官職責が殊に多いことから見て、使行時に貿易を重視したことがはっきり現われている。



〔図3〕槎路勝區圖の釜山鎮



【図 4】 朝鮮船入津之図慶応大学図書館所蔵



【図 5】 川御座船

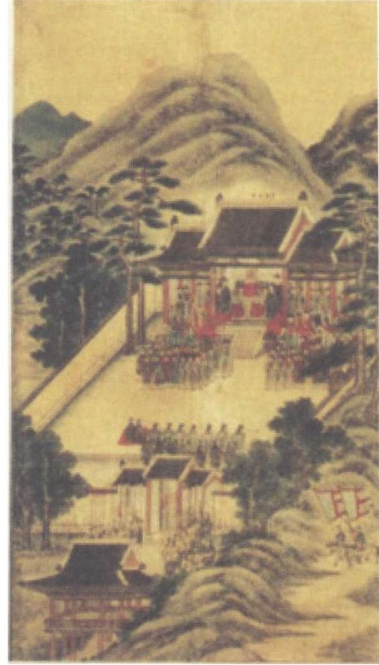
通信使の路程はソウルから出発して釜山の永嘉台から対馬藩の案内で出発する。対馬島から瀬戸内海を經由して大坂に到着するとそこから日本の船に乗り換えて、淀川をさかのぼり、淀浦で下船する。そこからは陸路で江戸までいく。

通信使一覧表から見るように正官の役職を見ると正使副使と従事官3人を除外した製述官、書記、写字官、画員等に数多い人員が配定されている。

これは交易と貿易に重点を置いた燕行使とは別に学問交流、文化交流に重点をおいたことを示すものである。交易と貿易に関することは釜山にある倭館から北京をつなぐ仲介貿易が行われるためである。釜山の倭館は長崎の中国商館より十倍を超える十万坪の敷地に、建物の規模も【図6】から見られるように大きい規模である。そこに常住する人々も500～600余りの人数であり、1700年代の初盤になると来往人が年間延八千人に達したという。



〔図 6〕釜山倭館



〔図 7〕東萊府使接倭使圖

朝鮮朝初期には対馬の来往船を歳遣船20隻、特送船、そして交易船である八送船だけに出入を制限したが、対馬は交易の量をふやすために八送船をより大型化して、年間50隻を超える貿易船が釜山を出入したという¹。1684年に長崎に中国商館が開設されてからはその前より交易量は減少したが、しかし仲介貿易は好況がつづいた。

漢陽から北京までの燕行使の路程は時期により若干の変動はあったが、従来の路程を若干変更すると移動が可能であった。現在当時の路程図に対する記録は多く伝わっているが、案内図である画を調べるのは難しい。断片的なものとして万里の長城、紫禁城等を描いたいくつかがあるだけだからである。その代わり、清朝の勅使である阿克敦が画工に描かせた「奉使圖」(20図)がある。総20幅で、鳳凰城の外で野宿する場面から、漢陽の慕華館、そして帰路の義州に至るまでの風光を描いたものが題画詩と共に伝わっている。

これを通して当時の社会相、生活相、儀礼、風俗、遊び、政治、文化、経済等の多方面の様相が調べるられる。一方、1748年通信使の画である「嵯路勝區圖」が伝わっている。この画は釜山の出発の光景から、江戸にて国書奉呈に至るまでの日本の路程に従って各地方の風光と文化を含めており、当時の文化を調べるには大変面白い資料である。

¹ 李進熙、『江戸時代の朝鮮通信使』、講談社学術文庫、1992年

先ず、[図6]は釜山出発の場面を描いた作品である。画の左側に釜山という地名が表記されている。画幅の中央に高くそびえている子城台の下から釜山鎮城が囲まれている。城の外側にある台が永嘉台であり、その上に立っている建物が息波樓である。永嘉台の後ろ側から市街地があり、海には日本へ向かって出発する使行船が待機している。使行船には使行一行が乗船する3隻があり、各船には荷物をのせる従船が各各1隻毎についてあり、総6隻として船団を構成する。渡海船は新しく建造する場合もあるが普通は慶尙左右の水営に属する軍船を利用する場合が殆んどである²。その他、永嘉台の入口の豆毛浦には対馬の護行船6隻と船団を前から誘導する案内船2隻、総8隻が待機していて、いっせいに対馬を向かって出発する。

当時の状況に関する理解のために「燕行圖」と「槎路勝區圖」から、いくつかの画を紹介する。



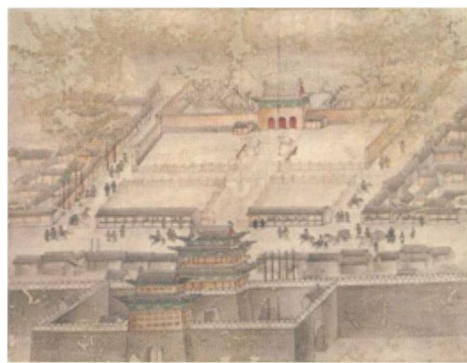
【図 8】 万里長城



【図 9】 紫禁城太和殿

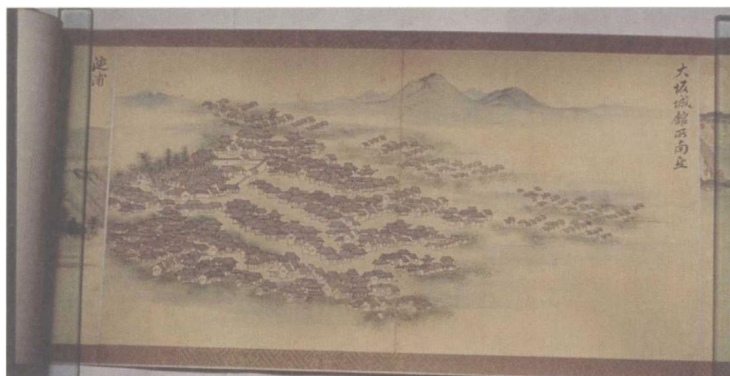


【図 10】 紫禁城 未詳



【図 11】 保和殿 未詳

² 「槎路勝區圖」の[図4]の渡海船と同一の船が慶應大学図書館に所蔵されている[図5]の船である。渡海船は通信使派遣の時にたまには製作することもあるが、通常であれば慶尙左右の水営に所属する軍船を利用する場合が一般的である。軍船の場合、設計上の変化はあまりなかったのである。資料を総合してみると、軍船の製作は堅固性に重点を置いたようである。



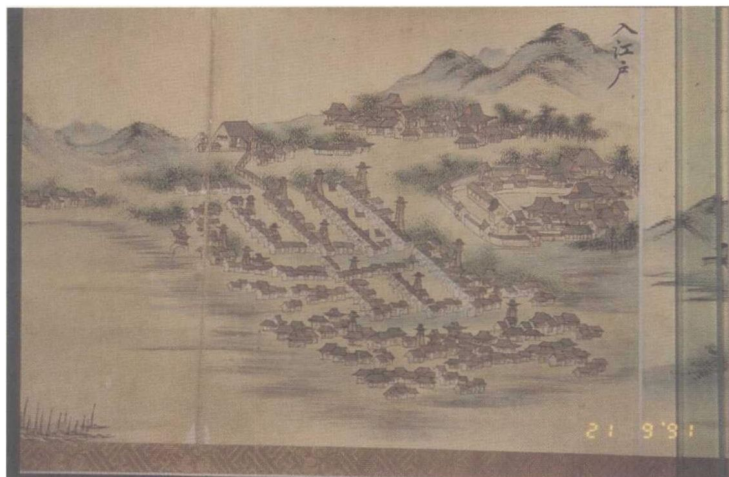
〔図 12〕 榎路勝區圖 大坂城



〔図 13〕 榎路勝區圖 淀浦



〔図 14〕 榎路勝區圖 津和



【図 15】 槎路勝區圖 入江戸

今まで見たとおり漢陽から北京、そして江戸を連絡し合うこの道は清、朝鮮、徳川幕府三国を結ぶ幹線として、当時としてはホットラインであった。いわゆる政治、経済、文化を伝達する大動脈であり、一方では緊急時北京から、或いは江戸から起った事件が一ヶ月で漢陽を経由でそれぞれの地へ伝わったという。従って、この道を三国を連絡し合う文明の道、貿易の道であると名付けたい。

3. 異文化の受容と朝鮮の朱子学

1) 小中華思想と夷狄の国

朝鮮は中国大陆から明が亡びて清が建国すると自ら自分を中華文明の嫡子だと認識する。このような文明優越主義的な小中華思想は18世紀前半まで表出されるが、18世紀後半に入ってから是一部在野の知識人の間で清の乾隆・嘉慶期の燦爛な文明の実象を見ようとする動きが起こる。すでに丙子(1627)・丁卯(1636)2次にわたって清との戦乱により朝鮮は表面的には清の要求に従って冊封体制を受容したが、内面的には首肯しなかった。従って清に送る公式文書以外の私文書には清の年号ではない明の年号をそのまま使用する等、屈折した心理現象を現わしていた。

このような対清観は社会全般に拡散されていた。明代の文人士者らの中から明に義理をまもらず、清朝に協助した人物に対してはその学問の高下をとわず、忌避する現象が彭排した。殊に、燕行使として北京の宿所である会同館に留まりながら清朝文人らと明との義理問題で論争をすることも茶飯事であった。結局、これが外交的な問題にまで飛火することになる。清朝初期には会同館の外部人の出入は比較的自由であったが、この問題によって外部人士らの出入を厳格に統制することになっ

た。

しかし、たまにはそれに拘わらず、朝・清文士らの交遊・世交関係は子子孫孫の代代につなぐ学問的交流と友誼を深める場合が多くあった。1712年燕行の道に出た金昌業(1658–1921)と1782年、1794年2回にわたって謝恩使の副使、正使の任務を果たした洪良浩の場合がこれに該当する。

金昌業は1712年兄である金昌集(1648–1722)が謝恩使の正使として燕行の道に出ると随行員の資格で北京へ行って帰るようになる。この時の旅行記である金昌業の『老稼齋燕行日記』は燕行録の白眉といわれている作品である。兄弟6人の内、金昌集、金昌協、金昌翕、金昌業らは文名が高く、官吏として、又、名文家としての名望も高い。これらの兄弟の詩を編んだ『金氏聯芳集』は浙江の文士寧水楊澄の序と詩評を附けて出刊し朝鮮と中国で膾炙された。当時金昌業と清朝の儒者李光地との出会いは一大事件であった。金氏一家と中国文士との交遊は金氏兄弟の当代だけでなく、古くは曾祖父である金尚憲と明朝末年の御使である張延登一家との出会いから、玄孫金益兼と金日進、そして5代目の孫である金在行にまでつづき、浙江と杭州の文士である陸飛、嚴誠、潘庭筠にまでつづく。殊に張延登は魚洋王士禎の外祖父である。張延登は金尚憲(1570–1650)の『朝天録』に序刻を附けた。

王士禎と朝鮮後期の四家である李德懋、柳得恭、朴齊家、李書九等らとの出会いもここから始まる。王士禎が『池北偶談』、『感旧集』の両文集に金尚憲の詩を引用したことも、『清陽文集』を対照し考証を加えたこともやはり世交関係から始まったことである。又、洪良浩(1724–1802)と清の礼部尚書であり、四庫全書の総撰官である紀昀と、その祖孫らとの交遊も代代につづいた。殊に洪氏家の使行は1647年の謝恩正使である洪柱元から始まり、1850年の謝恩副使である洪輝石にまで100余年の間、燕行に参加しながら清の文人・官吏との交分を重ねた³。

一方朝鮮知職人らの名分重視の朱子学的な対清観とは別に、活気を帯びたことは仲介貿易である。燕行を通して訳官と商人が主導した公貿易と私貿易その外に、国境の周辺から官吏らの目をさけた密貿易も行われていた。すでに言及したように、17世紀初めの朝鮮が直面した大きい問題は経済的な窮乏問題であった。戦乱によって激減した人口問題も大きい難題であったが、戦争賠償のために支払うべき歳幣もまかなうのが難しいほどの難題であった。これを打開することができたのは清からの歳幣減税もあったが、清と徳川幕府をつなぐ仲介貿易が大きい役割を果たしたという⁴。

一方、朝鮮人らの徳川幕府に対する認識はどうであったか？ 徳川幕府もやはり朝鮮人の華夷観から例外ではなかった。友好と親善という名分論とは別に朝鮮人らの

³ 牛林傑、「誇文化交流与文化誤読」、2006年10月国際日本文化研究センター第29回国際研究集会発表論文

⁴ 柳承宙、「朝鮮後期朝清貿易小考」國土館論叢 30、1991年の引用部を、柳承宙・李哲成『朝鮮後期中國との貿易史』景仁文化社、2002年から再引用